I　東アジア

1 韓国

カラオケ・ルームの爆発的流行

中川雅彦

伝統的な遊び　韓国の伝統的な遊びで代表的なものとしてユンノリ、チェギチャギ、タクチがある。

ユンノリとは双六である。立方体の賽子ではなく、四本の木片を投げてその裏と表の組み合わせで駒の進み方を決める。双六盤には二九の点とその道が描かれている。駒を進めるとき、他の駒と重なる場合、その駒の進行に便乗するとか、盤の点によっては道を選択することができるなどの独特のルールがある。

チェギチャギとは、穴のあいた銅銭を布や紙で包んだものを蹴って遊ぶものである。銅銭を地面に落とさずにどれだけ多く蹴ったかを競う。タクチとはメンコ遊びである。

こうした伝統的な遊びは今日の韓国でも見かけることがある。特にソルラル（新年）やチュ

ソク（お盆）など、家に親戚が集まるときによく行われるものである。

今日では、親戚や友達が家に集まるときに、花札や囲碁もよく行われる。花札は、韓国が日本の植民地であったときに日本から入ったものである。また、韓国には棋院（囲碁道場）も多い。

娯楽産業の発達

近代化した韓国の人々の遊びがこうしたものにとどまっているわけではない。今日、韓国の街では卓球場、ビリヤード場、そして「オラクシル（娯楽室）」と呼ばれるゲームセンターを探すのにほとんど手間がかからない。

日本の大学生が授業に出なくても、麻雀屋で高度な頭脳を駆使して奮闘するのと同じく、韓国の大学生は授業に出なくても仲間と卓球場やビリヤード場にはよく出かける。オラクシルは一九八〇年代前半に登場したが、そこでは古い日本製の機械が奇妙な音を出しつつ、青少年の相手をしている。

一九八〇年代半ばには野球練習場（バッティングセンター）、ゴルフ練習場などが現れてきた。野球は八一年にプロ野球ができてブームとなった。ゴルフはそれより少し遅れて大衆化してきた。

こうした練習場は土地所有者の税金対策でもあった。地価の高いソウル市江南区にはそうした野球練習場、ゴルフ練習場が多い。

一九八〇年代末からは小さな映画館が増えてきた。九〇年ころからは、「シルレナクシ」（屋内釣り堀）という銭湯の湯船のような釣り堀が現れた。同じころに街のあちこちにボウリング場が建てられボウリングが流行した。こうして韓国の娯楽産業は八〇年代末から多様化してきた。

一九八〇年代末から娯楽産業が急速に発達した背景には自家用車の普及があった。

一九八〇年に自家用車は約二一四人に一台の割合で普及していた。八五年には約九〇人に一台となった。それが八八年には約四三人、八九年には約三〇人、九〇年には約二三人に一台となった。自家用車が普及したことは、それだけ外での飲酒が難しい人々が増えたのである。これが娯楽産業の発達に拍車をかけた。

歌の部屋、ノレバンの急成長

多様化する娯楽産業のなかでとりわけ目立ったのは「ノレバン（歌の部屋）」と呼ばれるカラオケルームであった。ノレバンは「ノレヨンスプジャン（歌練習場）」とも呼ばれている。一九九二年のノレバンの勢いには目を見張るものがある。

ノレバンの数は、国税庁によると同年二月十五日には全国で五九〇軒、うちソウルには六〇軒であったのが、七月十五日には全国で六二〇〇軒、ソウルで一九〇〇軒にも増えた。すなわち五カ月の間に全国レベルで約一〇倍、ソウルで約三二倍にもなったのである（『東亜日報』一

九九二年八月十七日付)。

娯楽産業でこれだけ爆発的に成長すると当然税務署から目をつけられる。一九九二年七月の確定申告では国税庁はノレバンの申告に満足せず、修正申告の締切を一日延期した。また、九月にはカラオケ機器使用について特別消費税を課すことが決定された(『中央日報』一九九二年九月十四日付)。

一方、「カラオケ・チプ」と呼ばれるカラオケ・スナックは韓国に一九八〇年代前半に現れた。こちらのほうも盛んである。九二年八月、韓国ではカラオケのマイクで感電死するという事故が二件発生した(『朝鮮日報』一九九二年八月十日付および十二日付)。そのときから韓国では、カラオケ・チプやノレバンに行くには手袋が必需品だという説が流れた。

カラオケ・チプは、感電死の危険度はあまり高くはないものの、カネがかかるし、酒を飲めないと楽しみが半減するし、マイクがまわってくるまで順番を待たねばならない。また、未成年だと入れない。それに対しノレバンはカネがあまりかからないし、順番を待たずにすむし、年齢制限も厳しくない。また、「ノレヨンスプジャン」(歌練習場)というとおり、自分の歌を他人に聞かせる自信のない人も楽しめる。すなわち、日本でカラオケ・ボックスが流行ったのと、韓国でノレバンが流行るのはまったく同じ理由なのである。

それに韓国の人々はそもそも歌や踊りが大好きである。それが、都市化が進み、人々の生活

が個人主義的になってくると、他人が自分のそばで大声で歌うのに対して不寛容になる。ノレバンの流行はまさに韓国の都市化の産物である。

ノレバンの料金は三十分で一九九二年当時五〇〇〇ウォン（約八〇〇円）ほど、だいたい一つの店が一五～三〇部屋ぐらいを持ち、一部屋が約二坪ほどである。機械は日本と同じくレーザーディスクである。しかし、画面の製作までは追いついていないらしく、九三年現在ではノレバンで歌ごとに準備された画面は見うけられない。

歌は韓国の歌がほとんどであり、日本の歌はないようである。アメリカなどの外国の歌は翻訳された歌詞が画面に出てくる。

ノレバンが「歌練習場」であるためか、機械が客の歌に点数をつけるようになっている。本物の歌手が自分の歌を歌ってみると、二〇点しか出なかったこともあるという。この厳しい採点者から高い点数を獲得するには、無条件に高くて大きな声を出すといいともいわれている。店によっては、誰が聞くのか知らないが、客の歌を録音してそのテープを客にプレゼントするサービスもあるという。

ノレバンではコーラやジュースなどを頼むことができる。はじめは酒を出すことは禁じられていたが、一九九二年六月から酒を出すノレバンも出てきた。これは、保健社会部（日本の厚生省に該当）が酒類販売業を「団欒酒店」と「遊興酒店」とに区分、ノレバンは「団欒酒店」

とすれば酒を出せるようになったからである（『朝鮮日報』一九九二年六月十七日付）。

ノレバンの隆盛のおかげで韓国の飲み屋はかなり静かになった。そのうえに「団欒酒店」のノレバンが増えると、歌声で賑わっていた学生街の飲み屋は、おとなしい紳士たちの憩いの場に変わるかもしれない。

ノレバンの流行とともに、韓国ではカラオケ用のレーザーディスクを備えたオーディオ・セットの人気が高まった。そのうち金持ちのなかには自宅に防音装置を施した歌練習場を造る者も出てくるかもしれない。

韓国娯楽産業の展望

日本でカラオケ・ボックスの出始めのころがそうであったように、韓国でもいろいろな事件が起こった。ノレバンは密室となるため、暴力事件などを起こすには絶好の場所となったりもした（『中央日報』一九九二年八月二十六日付、『朝鮮日報』同年九月三日付）。

また、カラオケやノレバンは「倭色文化」（日本の低俗な文化）だからけしからんといった主張もある（『中央日報』一九九二年九月十三日付の「読者の広場」欄）。しかし「日本の文化侵略」を憂慮している人も、結構ノレバンに通っているようである。

花札は日本から入ったものであるにもかかわらず、「ウェノム（倭奴）の文化だから、やめろ」とか、「オラクシルの機械は日本から入っているから行くな」という主張は、韓国ではほ

とんど聞かれない。最近はかなりのファミコンソフトが日本から入って、韓国の子供たちの人気をさらっているが、反日的な人々も子供たちのおねだりには弱いようである。

今後、韓国人の生活により多くの余裕ができ、娯楽産業の需要が増えると、より多くの娯楽産業の種類、ノウハウ、ソフトが隣国から入ってくることは避けられないであろう。

［参考文献］

崔常壽『韓国民俗遊びの研究』、成文閣、ソウル、一九八五年。（韓国語。伝統的な遊びについての研究書）

（なかがわ　まさひこ／アジア経済研究所動向分析部）